

令和 2 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般入学選考後期日程

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題 あなたにとって「幼馴染み・おさななじみ」とはどのような存在ですか。また、将来子どもに関わる仕事につく者（例えば教員・保育士等）として、あなたは子どもたちが保育所・幼稚園・小学校で良き「幼馴染み」と出会うために、どのようなことに気を付けたいと思いますか。次の文章を参考に、800字以内で述べて下さい。

小池昌代（詩人・作家）

卒業してから、ほぼ半世紀。中学校の同窓会に参加した。歳（とし）を重ねた互いの顔が、しばらくすると、ほろほろと崩れ、底の方から往時の面影がふわっと浮上し驚かされる。面影とは捉（とら）えがたい言葉だ。その人がその人であることの、動かしようのない証（あか）しのようなもの。それがゆらめいては消え、消えては現れる。何十年という時間の荒縄を手繰（たぐ）り寄せながら、私は相手の目のなかに映る、かつての私を探していたのだろうか。

百人一首には、幼なじみとの邂逅（かいこう）を詠（よ）んだ、紫式部の歌が入っている。

「めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな」

会えたと思ったのもつかの間、本当にあなただったかどうかの見分けもつかないうちに、なんとまあ、あわただしく、いなくなってしまったことか。紫式部は、そんな女ともだちを、雲に隠れてしまった夜ふけの月に寄せて詠んだ。

長い時を経ての再会ならば、それだけで詩のテーマになりそうなのに、作者はあえて、居たものを去らせ、もう、ここにはないものへの愛惜を歌った。姿を消した友、姿を隠した月。この歌の芯には美しい空漠（くうぼく）があり、そのうちに、余情が幾重にも輪を描いて広がる。

若い頃の一時期を共にすごした相手は、誰にとっても特別なもの。自分には全く記憶のないことを、幼なじみが覚えていることがあって、失われた時代が、そこで初めて、貝合わせのように完成する。生家を離れ、別の土地をめざして歩かねばならないのが、人間の運命の基本形なら、幼なじみとは、はるか昔に別れた分身だろう。そうでなければ、こんな瞬時に心が繋（つな）がるはずがない。

（股旅日記 17 宮崎日日新聞 H31年4月21日）